

## 五重要義特輯號發刊餘言

前 田 聽 瑞

わが淨土一宗は昭和十二年三月、鎮西・勢觀・記主の三上人の大遠忌を嚴修せんとしてゐる。

靈峰華頂の瑞雲動くところ、三人の恩徳を念じ、以て志勇精進、常行法施の願行を成滿するの日も今や二年の後に逼りつゝある。この大遠忌こそ、全宗門緇素の胸底へ、三上人が大悲傳普化の大精神を吹込むの盛儀である。今や閻祖を経て五重制定の大業は成り、宗礎ますく固く、傳法相承の宗基いよいよ鞏く、宗運は年毎に隆盛を加へつゝある昭和の御代に、閻祖の雄風、宏業を偲び、全宗門こそつて宗門的追慕と感謝の至誠を運ぶことは、傳法精神を振起し、宗學を明徴にする點に於て、決して無駄事でないことを確信する。

惟ふに中興西蓮社了譽岡公は本地高邁、博綜貫練、夙に大統を稟承し宗風を顯揚し、廣く鸞綽の芳蹤を祖述し、導空の嘉模を憲章し、就中二藏二教の判釋は教相の淵源、義門の江海、加るに五重傳法の開創は末代往生の骨目、一宗傳燈の肺肝、その功勳列祖に過ぎ、その徳光先賢に超ゆるものがある。いつ何時追想しても感謝感激措く能はざらしむるものは閻祖が五重の制定である。しかし感謝感激の内容は

たゞ回顧追慕に止まつてはならない。吾人は開祖の全宗門の大業を追想すると共に、さらにこれを繼承發展せしむべく、躍進淨土宗の十分な基礎を築き上げねばならない。

しかも時代には時代の色彩があり、その特殊の要求がある。日本は既に五百有餘年前の日本ではなくその導御開化の方向は多端である。わが宗門は五百有餘年前の開祖の先見達識を追慕し、その報宗的精神を讃仰すると共に、それによつて導かれた發展淨土宗を更に躍進せしめる方法に於て十分周到であらねばならぬ。この意味に於て吾等佛教専門學校に職を奉ずるものは聊か宗恩の萬一に酬ゆべく、勉めて五重精神の活現を期すべく企てた。たゞこの事、專に徹せざる嫌あるも、こは編者自らの見るところによつて、わが教授各位に執筆を煩はしたのであるから、一切は擧げてこれ編者の責に任ずるのみである。

終りに特記して慚謝したいことは、何分にもこの種の執筆、編輯が一方ならぬ注意と努力とを要するため、その刊行が豫定よりも意外に遅延したことである。しかし、事情はとも角、發刊の延引についてはいくら慚謝しても足りない思ひがする。しかし、各自の論策がやがて實を結び、一冊の雜誌が出来上るのは容易なことではない。今この小誌を世に送るに當つて衷心の感謝と慚愧との交差を、こゝに表白せざるを得ないものがある。

佛教専門學校文書部

部長 前田 聽 瑞

椿 漆 矢 阪 黒 加

間 倉 口 川 藤

秀 純 眞 龍 信 寛

美 成 良 道 善 照